
ななつ.....

ことぶきはじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ななつ……

【Nコード】

N2179Z

【作者名】

ことぶきはじめ

【あらすじ】

君島静奈が青井優に語る、学校で起こる怖い話。それをオムニバス形式で掲載していきます。

プロローグ（前書き）

怖い話が苦手な方はご遠慮ください。また一部残酷描写などもありますので、こちらも苦手な方はご遠慮ください。

プロローグ

ななつ……

作：ことぶきはじめ

なぜ彼女に声を掛けたのか。

声を掛けなかったら、彼女はずっと独りぼっちだったかもしれない……。

私を理解できる人間なんて、この世には存在しないのに、なぜか彼女は私を理解してくれそうな、そんな気がした。

もしかしたら、彼女は私が捜している人だろうか……。

だから声を掛けた。

おそらく、それが始まり……。

土曜日の正午過ぎの教室に、きみしましずな君島静奈はただ一人、本を読んでいた。

今にも降り出しそうな分厚い雲のヴェールが空全体を覆っているため、昼を過ぎたばかりだというのにやたらと薄暗く、静奈のいる教室も例外ではない。

教室の電気は点灯しているが、それでもこの陰鬱とした雰囲気を払拭することは出来ずにいた。

いつもなら校庭から聞こえる部活動の声も、この天気のため、開け放たれた窓からは僅かに聞こえてくるだけである。

静奈は湿った風を頬に受け、フウと嘆息する。それから「まったく……」と小さく呟いた。

視線を彷徨わせていた文庫本を閉じ、ゆっくりとした動作で窓際まで立ち寄って、窓を閉める。

本来なら帰宅部である彼女は、すでに下校していてもおかしくない。けれど、ここ最近の物騒な事件のせいで、彼女の兄である静^{しず}也^やが迎えに来る手筈となっている。

静奈の両親の帰宅はいつも遅く、その帰宅の遅い両親の代わりに何かと面倒を見てくれるのが、少し歳の離れた兄の静也だ。

静奈は兄の静也以上にしっかりしている。両親の信頼もある。けれど静也は妹の静奈をいつも心配し、なにかと世話を焼きたがった。静奈にしてみればそれが少々鬱陶しくもあったが、ここ最近の通り魔事件を考えれば、やや仕方のないことでもあった。それに兄の顔を見ないというのも何か寂しいものがある。

それでも、ここまで過保護すぎるのもいかなものか。とも思っており、兄に向かってそんな事を言えば、目を三角にして憤慨するかもしれない。

兄には少々シスコンの気があるのだ。頭の隅でそんな事を考え、閉じた窓枠に手を当てたまま、静奈は頭を振った。

英語や運動をえらく苦手としてはいるものの、全般的には成績優秀ではある静奈だが、料理は苦手の部類である。そんな静奈に対して朝昼晩と三食をきちんと準備する静也は、静奈にとっては必要不可欠な存在であった。

だから下手な事を言って機嫌を損ねるわけにはいかない。自分の生活環境を悪くしないために、以上のようなことを兄の前では口にしないでおこう、そう心に誓う。

もっとも、普段から表情の乏しい静奈の心の動向など、無頓着と朴念仁が服を着て歩いているような兄には、決して見破る事など出来ないのだが……。

クルリと身を翻し、自分の席へ戻ろうとする。その時、どこから

入ったのか分からない風に、長く艶やかな静奈の黒髪がふわりと舞上がった。

またか。そう思い周囲を見渡すが何も無い。やや乱れた髪を直して静奈は再び席に着き、読書を再開した。

窓を閉じてしまえば外界の雑音は全て遮断され、静奈の息遣い以外なにも音を発するものはない。

正面の黒板の上に掲げられている時計でさえも、静かに時を刻むだけである。ただ静奈の、本を捲る時の音だけが、この教室に存在していた。

十数ページほど読み進めたところで、ふと何かの気配を感じる。本をそのままにして顔を上げ、辺りを警戒する。

静奈の切れ長の目が、教室の片隅にいる人物を捉えた。

静奈は自分が、部屋に何者かが入ってきたのも気付かないくらいに読書に集中していたのだろうか、と小首を傾げる。

ズボラな兄の静也などであれば、十メートル先からでもその存在を感じることが出来るし、他の誰かが部屋に入ってくれば、静奈にはその気配が分かる自信があった。

だが、教室の隅にいる人物を確認すると、自分が気配を察するこ
とが出来なかったことに納得した。気配をなるべく感じさせないの
は、彼女の得意技でもあったから。

「ようやく気付いてくれた、君島さん？」

気配を感じさせない得意技とは真逆に、その存在は他者の目を惹いた。

やや明るい色に染めた肩までの髪の毛は、軽くウェーブがかっており、相手を覗き見るような動作をするこの少女にはよく似合っている。

キョロキョロとよく動く大きな瞳に、小さな鼻、それに形の良い唇。頬にはソバカスの痕が存在するが、それがこの少女に愛嬌さを醸し出していた。

身長は静奈よりもやや高い。その彼女がズカズカと静奈の傍までやってきて、ズイツと身を乗り出して静奈の顔を覗き込んだ。

静奈も負けじと、じつと相手を見つめ返す。もつとも相手からすれば、睨まれている感じがするのだが……。

「何か用かしら？」

——青井優。あおいゆうそれが彼女の名前だった。

優はおどけて肩を竦めてみせ、それから静奈の前の席の椅子に跨るようにして座り込んだ。

背もたれの部分に肘をつき、右掌に自分の顔を預ける。

「なーんかさあ、こう暇でさあ……」

気怠そうに、そして相手に対しては甘えるような声を出す。

今度はやや下方から静奈の顔を覗き込み、何かを期待するような視線を投げつける。

静奈はそんな優を一瞥すると、文庫本を閉じ、それを鞆に仕舞い込もうとする。

それを見た優が慌てた。

「ちょ、ちょ、ちょっと、なんで帰ろうとするわけよ！ それって

すごく失礼じゃない？」

「だったら青井さんも帰ればいいじゃない？」

「土曜日に早く帰ったつてしょうがないじゃない！ 君島さんだつて、暇なんでしょう？」

「ううん。忙しいわ」

「何でそんなにイケズなのよお！ 可哀そうなあたしに、ちょーつとぐらい付き合ってくれてもいいじゃない！」

「嫌」

淡々と素っ気なく答える静奈に、優はバタバタと腕を振り回す。構って欲しいアピールをしているのだが、目の前でそれをやられれば少々鬱陶しい。

両手をバタつかせる優を黙って一睨みする。その表情は綺麗なだけに迫力がある。優はそんな静奈の視線に耐え切れず、大人しく席に着いた。

その時、静奈の鞆の中から着信メールを報せる音が鳴った。鞆の中を漁る静奈を見ながら、優は椅子に座りなおして背凭れに両腕を預け、そこに顔を乗せる。

「君島さんつて、携帯持ってるんだ」

心底意外そうに、携帯を弄る静奈を見つめる。

「まあ、家族以外誰も電話しないけどね」

「ふーん。で、誰から？ 彼氏とか？！」

相変わらず人の話を聞かない奴だ。静奈は携帯を弄りながら、頭の隅でそんな事を考える。

その優はまたしても身を乗り出して、静奈の携帯を覗き込もうとする。

静奈はクルリと身体ごと相手に背を向けて、携帯画面を見られないようにする。

暫くの間無言でカチカチと携帯を弄り、それから携帯の蓋を閉じると、再びそれを鞆へと戻した。

「ねえねえ、誰からのメール？ やっぱり彼氏とか？」

興味津々、喜色満面といった感じで、静奈に問いかける。静奈は「違うわよ」と静かに相手の言葉を否定する。けれど優は引き下がらずにいない。

静奈は優がどうやら解放してくれそうにないので、渋々といった感じでメールの内容を話した。

「お兄ちゃんからのメール。迎えに来るのは4時を過ぎそうだって、そういう内容のメール」

「ふーん、そうなんだ。あつ、じゃあ、それまでは暇なんだ！」

優の瞳を見れば、その瞳の中がキラキラと輝いているのが見えた。静奈が黒板の上にかかっている時計を見ると、時計の針は1時20分を指し示している。

あと2時間40分。読書をするだけでは間が持ちそうにない。今読んでいる文庫本も、あと一時間もすれば読み終わるだろう。

それが少し勿体なく感じられるし、目の前の優を一人にしておく、こちらの読書の邪魔をしかねない。

「しょうがない」相手に聞こえないくらいに小さな声で呟くと、静奈は優の提案に乗ることにした。

けれど話題を提供できるほど、静奈は流行に敏感な方ではない。どちらかといえば一人でいることを好むし、またその方が気が楽だったので、あえて他人を自分のテリトリーへ入れることはしなかった。

自然と興味のあるものは、自分の世界観を構築するものだけとなってしまう。話題が少ないのはそのためだろう。

けれど静奈はそれでもよかった。自分を理解してくれる人物など、兄の静也以外存在しない。そんな思いがあるため、静奈はクラスメイトとは一定の距離を保って接している。

だが目の前に存在する青井優は、その距離を乗り越えて静奈と接していた。そういう意味においても、青井優という少女はかなり稀有な存在であった。

それはさておき、何か話題を提供できないものだろうか？ 静奈がそう思った時、向かいに座る優が、きつかけを作ってくれた。

「何か面白い話ってないの？」

優が瞳を輝かせ、静奈に尋ねてきた。

優は静奈が、優が知る限り他の色々な人物よりも沢山の本を読んでいるのを知っていたし、その沢山の中から何か面白い話でも聞きだそうと思っただけかもしれない。

だから特に意識したわけではないだろう。けれどこれは静奈にとつてありがたかった。

静奈は先ほどしまった携帯を思い出し、それからひとつ、目を閉じた。

「じゃあ、学校の不思議な話でもしましょうか？」

「えっ！ 学校の七不思議？ あの、……トイレの花子さんとかつてやつ？」

「それとは違うけど……」

「なーんだ、違うのか」

相手の落胆する表情を見て、静奈は薄く笑う。

「けど、実際にあった話よ。そういうのは嫌い？」

「怖い系の話？ それはちょっと苦手かも……」

「ふーん。じゃあ、私が読んだ本の話でも聞く？」

「どんなマンガ？ ジャンプ系だったら大丈夫」

「マンガじゃないわ。デユマ・フィスの……」

静奈が作品名を言おうとしたところで、優が待ったをかける。
難しそうな表情で右手人差し指を、自分のおでこにあてがう。その仕草がどこかコミカルで、愛嬌を誘う。

「やっぱり怖い話にして。難しい話は眠くなるから……」

「……………」

静奈は、真面目にそう言う優を、マジマジと見つめる。

それからコホンとひとつ咳払いをし、深く椅子に座りなおし頭を下げた。

演出だろうか、前髪が邪魔をして、静奈の顔が隠れてしまう。

「じゃあ、開けてはいけないメールの話でもしましょうか？」

下げた顔から、低く唸るような感じの声が聞こえてくる。

「えっ！ この学校って、そんな話があるんだ。私知らなかった！」

優は努めて明るく答えた。

「……………そうでしょうね」

またしても低く唸るようにそう言つと、静奈の顔がゆっくりと持ち上がり、その表情が露わになる。

優はその顔を見て、背中に悪寒が走るのを感じた。静奈の白い顔は、どこか無機質で、感情というものが読み取れない。

静奈の瞳が異様なほどに狂気の色を醸し出し、無機質なその表情はどこか能面のような畏怖を感じさせる。

本人には自覚はないだろうが、静奈は美人である。それこそ日本人形のような美しさがある。

その彼女がこういう表情をすれば、それは十分な迫力と、言い知れぬ恐怖があった。

優は静奈の発する狂気の視線から、抗うことが出来なかった。

静奈の白い顔にくつきりと浮かび上がる程に印象的な紅い唇が、ゆっくりと開き、物語を紡ぎ始める。

その声は、暗く沈んだこの教室に、ひとつの旋律として流れ出していた。

「これは私のお兄ちゃんが学生だった頃の話なんだけど――」

プロローグ（後書き）

ゆっくりと連載していきたいと思います。

メール 第壱話（前書き）

月島静奈が語る物語です。

メール 第壹話

ななつ……

メール

第一話

作：ことぶきはじめ

「うちの学校から送られてきたメール。これ絶対に開いたら駄目なんだって」

「えー、なんでえ？」

「死んだ生徒からのメッセージなんだって」

「バツかしいい」

「その生徒が死んだ時間が19：25で、その時間のメールだけは絶対に見たら駄目なの」

「何で死んだ時間が分かるの？」

「そりゃあ、警察が調べるから分かるでしょ」

「アホくさ……」

「……だよねえ」

その日も両親は遅かった。

かんだみのる
神田実は自分の部屋の時計を見る。棚の上に置かれたデジタル時計の数字は23:52だった。

すでに日付も変わろうという時刻なのに、両親はまだ帰ってきていない。

それは今に始まった事ではないし、両親からの束縛を何よりも嫌う年頃の少年にとつて、より快適な環境であつた。

実はそのささやかな時間を、存分に楽しんでいる。多少の寂しさを紛らわせながら。

学校から帰ってきてても、家の中から木霊す声は全くなく、自分の声の不気味に響き渡る。生活音は全くない。家の中に人もいない。

誰かに構って欲しいと思うこともあるが、それは当然のこととなりつつあつた。

そのような理由で実は無言で黙々と、自分で自分の世話をするしかなかった。洗濯、掃除、食事の準備。学校の勉強以外でも、実はやることが沢山ある。

当初はそれらが多少煩わしくもあつたが、今では日常の一部となつてしまっている。

いくら慣れたとはいえ、それらの雑務から解放されれば、夜の帳の落ちた時間になるのも仕方のないことであつた。

そしてその僅かな自分の時間を、実はパソコンの中で楽しむことにしていた。

パソコン本体の電源を入れ、画面が立ち上がってくるのを待つ。
このパソコンは一年ほど前、たまに早く帰ってきた両親が、実の暇つぶしにと買い与えたものだった。

ノート型のパソコンで、買った当時の値段は10万ぐらいだったような気がする。

かまうてやれない両親の贖罪なのだろうか。どうでもいいことに金をつぎ込むとは思いつつも、拒否するなどという愚かなことはしなかった。

画面が立ち上がると、とりあえずネットに繋ぎ、まずは自分の宛のメールをチェックする。

サイト運営などをしているわけではないので、メールチェックなどは時々しかないが、それでも何か変わったものが送られてくる可能性はある。

そして本日送られてきたメールが6通ほどあったが、ほとんどが広告などのメールであった。

最後のメールを削除しようとして、マウスを動かす指がピタリと止まる。差出人を見れば学校からである。件名には何も書かれていなかった。

怪訝に感じながらも一瞬、そのメールを読まずにそのまま削除してしまおうかと思う。けれどすぐに思いとどまり、内容を確認した。

——わたしを探してください。

とだけ書かれたいた。

実は日付を確認する。日付は本日であった。次いで時間を確認する。時間は19:25。

不気味さが一瞬、実の全身を駆け抜けていったが、それはすぐに不快感へと変わっていった。

「クラスの奴の悪戯か？」

不快感からか、ついついそんな独り言が口から零れる。

暇なことをする奴もいたものだ。こんな悪戯をしそうなのは……、
いくつかクラスメートの顔が実の頭を過っていった。

椅子の背凭れに体重をあずけ、上半身を後方へと逸らしていく。
なんとなくサイトを一覽する気分ではなくなった。

「……寝るか」

結局はクラスの誰かの悪戯だろう。なんとなく気が削がれたような気がして腹立たしい。明日学校に行った時にでも問い質せばいい。
上体を逸らし、椅子に座ったまま両手を天井に向かって突き上げ大きく伸びをして、自分の中に発生した靄を外へと追いやる。

それからフラフラと立ち上がり、部屋の電気を消す。ベッドへと潜り込んでふわぁと大きく欠伸をすると、そのまま夢の世界へと旅立っていった。

翌朝。いつ帰ってきたのか、そしていつ出かけたのか分からないが、とにかく両親はすでに家にはいなかった。

それを寂しいと思うことはなくなったが、やはり少しぐらい顔を合わせてもいいような気がする。

簡単な朝食を口に放り込み、朝のテレビを眺めながら咀嚼する。それから身だしなみを整え、家を出た。

通学路には燦々と朝の太陽が降り注いでいる。その陽の光を浴びながら、実は学校へと続く道を歩いていく。次第に生徒の姿も多くなっていく。

賑やかになる通学路を傍目に見ながら、昨夜のメールのことを考える。

あれは一体、クラスの誰の仕業だろうか？ と……。

「よお！」

いきなり声を掛けられた。相手の右腕が実の首を軽く締め上げる。軽く咳き込みながら、そんな事をするいつもの相手を見返した。

「おはよう、誠」

田所誠は、クルリと相手の正面へ回ると、おどけた風に敬礼した。

「おはよっす！」

手ぶらのまま、誠はフラフラと実の横を歩きだした。実はそんな誠を横目に見つつ、昨日のことを尋ねる。

「昨日のメール。お前だろ？」

「はあ、メール？ なんのこっちゃ？」

惚けているのだろうか？

一瞬そんな疑念が実の頭を過るが、誠は嘘を突き通せるほどポーカーフェイスが巧いわけではない。

こいつじゃないのか。そういつた悪戯をやりそうな人物であったが、その彼が違うというのなら違うのだろう。

長年の付き合いからそれぐらいのことは分かる。では他の奴らか？ 漠然とそんな事を考えながら、先を歩く誠の背中を眺める。

長細い誠の顔が、僅かに後ろを振り向いた。

「早く行こうぜ」

フラフラと先に行く誠に声を掛けられ、実はゆっくりと歩きだした。

学校に着き教室へ入る。自分の席に着き、うつ伏せになった。

昨日のメールの些細な疑惑が小さな棘となり、実の心の中に深く突き刺さる。

それが気になり、他者の雑音を遮断して、うつ伏せのまま自分の考えを纏めようとする。

送られてきたアドレスはこの学校からだった。時間は19:25。誰かが学校に侵入し、悪戯したのではないだろうか。

だとしたら何の目的で？ しかも『見つけてください』ってどういうことだ？

「……そりゃ実。幽霊からのメールだよ」

突然声を掛けられたことにビククリして見上げると、そこには誠が居た。相変わらずヘラヘラとにやついている。今はそれがどうも癢に障る。

やっぱりこいつが犯人か？

「へへへ、怖い顔すんなって。それに今、声に出てたぜ」

知らず知らずのうちに声が出たのか。恥ずかしさを隠すため、誤魔化すようにして頭を掻いた。誠に対しては曖昧な表情をみせる。誠は相変わらず、ヘラヘラと笑っている。どうもこの締りのない顔が昔から好きではないが、それでも一緒にいるのはなぜだろうか。

「まっ、そのメールだけどき、何かの間違いつてこともあるさ。気にすんなって」

誠の言うとおり、やはり考え過ぎだろうか。何となく心に引っ掛かるものを感じつつ、実はメールの件を忘れることにした。

結局、誰かに問い質すこともせず、その日の授業は過ぎていった。

朝からの快晴は夕方過ぎには崩れ始め、実が家に着くころには大粒の雨が降り始めていた。

家に入ると鞆を放り投げ、急いで洗濯物を取り込み、乾燥機にかける。その間に濡れて冷えた体を温めるため、シャワーを浴びた。シャワーから流れ出る温水に身を委ねつつ、ふと頭の隅に残っていたメールの件を思い出す。

学校では朝以来思い出すことはなかったが、家に帰って心地着けば、妙にそのことが気になった。

「気にするな」と誠は言っていたが、シャワーを浴びて心に余裕ができたことにより、メールのことが蒸し返される。

あの文面には一体、どういった意味があるのだろうか。『私を見つけてください』と書かれていたが、その“私”とはいったい誰のことなのだろうか。

シャワー口から降り注ぐ水滴が床のタイルに叩きつけられ、風呂場に響き渡る。

物思いに耽りながらも全身を洗い終え蛇口を止め、風呂場から出た。足マットで水気を切り、近くに置いてあるタオルで身体に着いた水滴を拭いとおった。

手にしたタオルを頭から被る。その奥から「ふう」とため息が漏れ聞こえてきた。

いつもより早い時間に自分のパソコンの前にいるのは稀であるが、それは日常の家事の手を抜いたからという理由がある。

手を抜いたのは、やはりあのメールが気になったからである。今日もパソコンを立ち上げ、メールをチェックした。

一件のメールが受信ボックスに入っている。宛名はやはり実の通う学校からであった。

やはりという思いと不気味さを内包しつつ、実は僅かに震える指でマウスをクリックした。

ディスプレイに、届いたメールの内容が表示される。

——私を探してください。私は学校にいます。

短い文章ではあるが、昨日よりは幾分内容が踏み込んだものになっている。

——ゴクリ

実は生唾を飲み込む。カラカラと干乾びていく喉がやけに熱く感じられる。

実はこの不気味なメールの内容に、少し興味を持ち始めていた。この文章に対し、返信すればどうなるのだろうか？好奇心が実を支配していく。カーソルがグルグルと画面を所狭しとまわり始めた。

実の口から、絞り出すような、どこか呟いたような声が漏れる。

「返信……、してみようかな……」

これは冗談だ。何かの冗談に決まっている。絶対に何も起こらない。

大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫……。心の中でそう念じながら、恐々と文章を打ち始める。もしかしたら……、いやそんなことは、でも……。

——あなたは誰ですか？

実はたったそれだけを書くのに、たつぷりと5分以上をかけた。戸惑いと決意が心の中でシーソーのように揺れ動く。キーボードを叩く指が僅かに震え、目的の文字を正確に打ち抜くことも出来ない。

やっと文章を打ったとしても、それを送信するためにEnterキーを押すのが躊躇われる。

それらは全て、この後に起こる事象が予想できないからである。これらが全てただの悪戯ならまだいい。

けれどそうでなかったら？

何かの悪意が込められていたとしたら？

恐怖は人間を魅了する。魅了されれば、その先にある真実を知ろうと思う。

その真実を知るためには対価が求められる。その対価は自分に払いきれものだろうか？

「いや。やっぱりただの悪戯さ……」

自分に言い聞かせるその言葉は、どこか弱々しい。緊張からか僅かに息も荒い。

実はEnterキーを、己の臆病さを振り切るように叩き押した。何事もなくメールは送信される。

クルリと周囲を見渡す。なんの変化もない。

当然だ。メールを送っただけで変化などあるわけがない。何かがあるとしても、そんなのは映画の中だけの話に決まっている。

自然と笑いがこみあげてきた。ゲラゲラと笑う声が部屋中に響く。

たったこれだけの文章を書くのに、えらく気疲れしたような気がする。

何事もないと分かった、自分のバカさ加減に呆れ返ってしまう。メールを送信するとき真剣に悩んでいたが、なぜそれほどまでに悩む必要があったのか。

その緊張が途切れたのか、それとも何かが起こるという期待に対し、あまりにもあっけなくメールが送信されたことに対する反動からか、実の笑はしばらく途絶えることはなかった。

ようやく自己の笑いの奔流から解放された実は、椅子の背凭れに体重をあずけて、大きく伸びをした。

——ソワリ

その時、実の背後を何かが通る……、いや、通ったような気がした。

項の辺りを何かがぬるりと触る。

背中が悪寒が走った。

素早く後ろを振り向くが、そこにはいつもの部屋の扉があるだけで何かが存在するわけではなかった。

いつも見慣れた自分の部屋が、どこか見知らぬ部屋のように感じられた。

メール 第壱話（後書き）

なんか色々と使い方がまだわかっていない……。

メール 第貳話（前書き）

今回は少し文章が短いです。

メール 第貳話

ななっ……

メール

第貳話

作：ことぶきはじめ

君島静奈の口が止まった。すすつと静奈の顔が窓の方へと吸い寄せられるように動く。

外はいつの間にか、大粒の雨が降り出していた。

勢いのついた雨粒が窓ガラスを叩いていく。窓に叩きつけられた雨水は、いくつもの川を作り窓を滴り落ちていった。

突如口を閉ざした静奈の顔を、青井優は訝しむようにして覗き込む。

静奈の瞳はどこか冷徹で、感情を持たない人形の瞳のように見えた。

「君島さん……」心配になった優が、静奈に声を掛けて肩に触れようとしたその時、突然雨音以外何の音もしないこの教室に、甲高いメールの着信音が鳴り響いた。

びっくりした優は手を引込め、二三歩後退する。その時足を絡めたのか、縛れるようにして椅子に倒れ込んだ。

静奈は落ち着きのない優を黙って見つめ、それから鞆の中にしまった携帯を取り出した。

唇の端が僅かに持ち上がっているように見える。自分の醜態を見て笑っているのだろうか？　だとしたらなんとなく気分が悪い。

優は静奈を睨みつけると、再び椅子に座りなおした。

「お兄さんからのメール？」

尋ねる優の言葉には、微量の不機嫌さが含まれている。静奈が優の顔をチラリと見るが、何も答えることはない。優がもう一度訪ねる。

「お兄さんから？」

静奈は携帯から視線を外し、優をじつと見つめる。見つめられた優はなんとなく居心地の悪さを感じ、静奈から視線を逸らした。

「お兄ちゃんからじゃないわ」

そう言った静奈の言葉は、疑念を誘うのに十分である。それに先ほど『家族以外の者からは連絡はない』と言っていたような気がするのだが……。

「じゃあ、誰？」

静奈の言葉は優の疑念、もしくは好奇心を誘うのに十分であった。静奈はじつと優の瞳を見つめ、小さく溜息をついた。

「この学校の、誰から……」

雨音だけがやけにうるさく、この静かな教室内に鳴り響いている。

顔色の悪さは否めない。

昨日の夜、差出人不明の相手へメールを返信し、その結果を待っている状況では、授業の内容よりもそちらの方が気になってしまう。なんとも不気味で意味不明なメール。それに対して返信してしまったということが、今更になって後悔される。

自分自身の愚かさを呪うが、その先にある好奇心を抑えきれないというのも、人間としてのサガかもしれない。

やってしまったことをとやかく言っても仕方がない。そう開き直るが、それでも後悔することしきりである。

何度目かの溜息が、自然と大きく洩れた。

「おい、神田」

困惑した表情で声のした方を見るとそこには、普段は柔和な表情をした男性が、今では眉を逆立てていた。

辺りを見渡せば生徒たちが自分を見ている。中には失笑している生徒も存在した。

状況が把握できた。今は授業中で、目の前にいるのは先生だ。

名前は栗原輝和。くりはるてるかず中肉中背で容姿には柔和な印象がある。男女と

もに生徒に人気があり、信頼の篤い先生だった。

実は慌てて場を取り繕おうとしたが、すでに遅かった。視界の向こうで田所誠がほくそ笑みながら手を振っているのが見えた。

「俺の授業がそんなに退屈か？」

「あ、いえ……」

反射的に起立する。起立したはいいが、咄嗟のことと言い訳が思いつかない。

目を伏せてなんとかその場をやり過ごす。人気のある先生だけに、敵に回した後が怖い。だからとにかく今は耐える。

少しでも上目遣いに相手の表情を窺う。窺った相手の表情は、逆立てていた眉を普段の位置に戻し、どこか呆れた表情に戻っていた。どうにかやり過ごせたようである。

「まあ、暇だったら寝てても構わないけどな、けれど他人の邪魔だけはするな」

「……すみません」

嫌味を含ませた言葉は、実を惨めにする。

それもこれもあのメールのせいだ。メールの送信者に対し、妙な怒りが込み上げてきた。

帰り道、誠が色々と話しかけていたが、それをうわの空で聞き流し、気付けばいつの間にか家に帰っていた。

先日から降り出した雨は今日になっても降り止まず、そのせいか家の中がどこか陰鬱な感じがする。

妙に薄暗く、それに息苦しい。何か圧迫されるような感じがある。別に普段と変わったところはなく、雰囲気だけが普段のそれとは違う。

おそらくこの雨と、先日のメールの件——もっとも自分の送ったメールの件かもしれないが——が原因だとは思うのだが、それでもこの感覚に妙な違和感を感じずにはいられない。どこか薄暗い廊下を歩いていく。

——ピタリ

実の背後でなにか、裸足で歩くような、もしくは水が滴り落ちるような、どちらともいえない音が聞こえた。

振り返ってみるが何もない。念のため玄関先まで戻って調べるが、やはり異常はなかった。

精神が過敏になってるのだろう。玄関の鍵をかけ、一つ深呼吸した。

実の平穩で退屈なひと時が、ゆっくり、ゆっくりと過ぎていく。夕食と呼ぶには少々遅い時間に食事を摂り、気付けば9時を回っていた。

とくに見たい番組も存在せず、いつもの通りパソコンを立ち上げる。

妙に胸の鼓動が早鐘をうつ。立ち上がってくるパソコンの画面が妙に遅く感じられ、それがどこかまどろっこしく感じた。

飲み込む生唾が妙に固い。これが固唾を飲み込むということか、などとそんな事を考える。

画面が立ち上がると同時に、いつもの軽妙なイントロが流れてきた。画面が完全に立ち上がったのを確認すると、すぐにメールの確認作業に入る。

受信しているメールは3件。うち2件は広告メール。最後の1件はやはり学校からのものであった。

時間はきっかり19:25。いつもの時間である。

（やっぱりきたか）

予想していたことであるが、それが当たったという喜びは全くなく、薄気味の悪さが心のどこかある。

実は震える手でマウスを動かし、ゆっくりとクリックする。

メール画面が展開された。そして内容を確認する。

実の瞳が大きく見開かれた。

——私の名前は青井——

「――優です」

「ちょっと！」

優が立ち上がり、静奈の言葉を遮った。

静奈は突然の優の言葉にビックリした様子も見せず、立ち上がって憤慨している優を静かに見つめた。

優の顔には明らかに不愉快な表情がくつきりと浮かび上がっており、しかもそれを隠そうとしていない。

「いくら作り話だって言ってもねえ、あたしの名前を出す必要性なんてこれっぽっちも無いでしょうが！」

それとも何？ 君島さんってものすごく嫌な人？ あたしをからかっているの？ それがそんなに楽しいの？」

優が本気で怒っていた。最後の方は多少演技がかっているが、不快であり、怒っているのも事実だろう。

感情のままに喚き散らす優の言葉が、静奈の鼓膜を苛立たしげに震わせていく。

静奈の綺麗な顔に、眉間の皺が刻まれる。神経質そうな声で優を宥める。

「分かったから静かにして。話を止めて帰るわよ」

「じゃあ、あたしの名前を出さないで！ どうせ作り話なんだから」

優の声のトーンが下がる。興奮していたことに気付いて、自制しているのだろう。

ただ声は依然不機嫌なままである。しかし静奈はそれを気にした様子もない。

「……………そうよ」

静奈が静かに答えた。

「えっ!？」

ソップを向いて椅子に座りなおした優は、一体何のことか分からず、再び視線を静奈に向け、彼女の白い顔をマジマジと見つめた。薄暗い教室にその白い顔がくつきりと浮かび上がっている。どこかそれが浮世離れしており、この世のものとは思えない。

優の喉が僅かに上下した。静奈の次の言葉を待つ。

「そう。青井さんの言うとおり、この話は作り話よ」

「あ、ああ——」

ようやく合点がいく。

「——やっぱりね」

優はどこかホツとしたような、地面に足の着いたような安堵感を
得る。

けれど見つめる静奈の表情は、何かを隠している感じがする。そ
れは一体何なのだろうか？

「そう、作り話。けれどね、世の中にある物語の多くは、どこかに
その原典となった事実があるものよ」

「じゃあ、君島さんが話してるこの物語も？」

「ふふふ、作り話だけど、嘘ではないわ。まあ、名前の方は別のも
のに差し替えましょう。気が利かなくてごめんなさいね」

「こっちこそ喚いたりしてゴメン。あ、あと、栗原ってあの栗原の
こと？」

「そうよ。どうして？」

静奈は薄く微笑んだまま、優に向かって小首を傾げてみせた。

「なんかさあ、あたしあの先生苦手でさあ……」

優はそう言って、心底嫌そうにして身震いし、顔を顰めた。

「なにかあったの？」

「ん？　そういうんじゃないんだけど、なんというか……その……」

優は自分の感性に忠実である。あの栗原はカッコいいし、生徒にも人気がある。

けれどどこか漠然と好きになれない。はつきりいえば嫌いであつた。

それをうまく説明することが出来ず、もどかしく感じる。

「分かったわ。じゃあ、そっちも名前を変えるわね」

「お願い」

静奈の提案に、優はどこか安堵した。

雨はまだ降り続けている。

メール 第弐話（後書き）

今回は色々ヒントがあります。

メール 第参話（前書き）

物語中での名前の変更は誤植ではありません。

メール 第参話

ななつ……

メール

第参話

作：ことぶきはじめ

——私の名前は工藤彩音くどうさいおねです。私は殺されました。私は今学校にいます。ここは暗くて寒い。

殺された人間？ そんなバカな、きつと何かの間違いだ。死んだ人間がこんな文章を書くわけがない。

実は必死に目の前にある文章を否定するが、けれどこの文章を全面的に否定することは出来ずにいた。しかしこの文章の存在自体は本物である。ならば、何かメッセージがあるのではないだろうか。

思考を切り替える。恐怖して思考を止めるのは愚かなことで、その先にある真実を知ることの方が大切なのではないか。

この文章を書いた人間は、生きているにしろ死んでいるにしろ、自分を見つけてほしいと願っている。なら、この差出人の意思を尊重することが大切なのではないだろうか。

悪戯だとしたらおそらく、自分は絶対に見つからないだろう、と

いう犯人の強い自信がこの文章から窺える。実はそういったゲームなのではないか？　だとすると実はそのゲームの対戦相手に選ばれただけのことだ。

だとすればこういった行為には腹が立つ。何せこちらの了承もなく、本人の意思とは無関係に一方的にゲームに参加させているのだから。実もこのゲームを無視してもよいのだが、何となく相手を確かめたいという欲求がある。

そしてこれがゲームだとすれば、相手はこちらに対して危害を加える意思是低いといえる。危害を加えて殺してもしてしまったら、自分の存在や自己顕示欲といったものを第3者へ伝達することが難しくなり、その後警察などの介入により、遊ぶことも難しくなる。

ゆえに暴力的な意味合いは少なくなる。もつとも、全く皆無というわけではないので、十分な備えは必要になるのだが。

けれどこれが、考えたくはない話だが、いわゆる死者からのメッセージならどうか。この場合はより自己の安全にかかわってくる。真偽のほどはともかく、送信者は『殺された』と独白している。その上で見つけてほしいと言っている。

推測するまでもないがこの送信者は、殺された後で学校内のどこかに隠された、ということになる。

この場合実は、どこに存在するのか分からない犯人に気を付けなければならぬ、という酷く曖昧な情報に基づいて行動しなければならなくなる。

しかしそれにしても……、

「これってあの『雨の日の通り魔殺人』のことだったりして……」

——雨の日の通り魔殺人。いつごろから忘れたが、何年か前から雨の日にかかる殺人事件。なぜ雨の日なのか分からないが、年に

2、3度は必ず殺人事件が起こった。

同一人物なのか、複数犯の仕業なのか、殺された被害者達にも共通点はなく、目的も犯人像すら見えない殺人事件。ただ一つ、雨の日にそれは起こるということだけが共通していた。

この事件に街の住人は、恐怖していた。

けれどここ2年ほどは犯人も大人しく、街の人達もまだ警戒はしているものの、表面上は落ち着いていた。噂では、犯人は死んだ、とか、すでに警察に捕まった、などの無責任な噂が流れていた。

実が独語した時、部屋のカーテンが僅かに揺れた。どこから風が入ってきたのかもしれない。

実は一瞬それに意識がいくが、特に気にすることなくパソコンの画面に見入った。

両手をキーボードの上に添え、何事が打ち込んでいく。

——工藤彩音さん、あなたは学校の生徒ですか？　そして今、どこにいるのですか？　あなたを殺したのは誰ですか？

一気にそれだけを書き込んだ。文章の最後でカーソルが点滅している。

二度三度と文章を読み直す。おかしい所はないと思う。すうつと息を吸い込むと、そのまま送信のボタンを押した。昨日ほど緊張はしなかった。

けれど『殺したのは誰ですか？』という問いかけは如何なものだろうか。悪戯だとしたら特に意味のある言葉とは思えないが、もし事実なら……。

そして工藤彩音という、おそらく学校の女子生徒だと思われる人

物だが、果たしていったい何者だろうか？ 工藤彩音と名乗る何者が存在するのか、それともこの名前自体が何かの情報なのだろうか。とにかくこれだけでは情報が少なすぎた。

自分のクラスにも他のクラスにもそういった名前は思い浮かばない。もちろん実が知らないだけという事もあり得る。

なにか調べる手立てはないものだろうか？ おそらくそれが、このメールを送信している犯人へと繋がるはずである。

もし犯人がいなくても、何かしらの真実に辿り着けると、実はこの時そう思っていた。

昨日よりも強い違和感、もしくは他者からの視線を感じつつ、実は眠りについた。

雨はまだ降り続けている。天気予報でもここ数日は、雨が降り続くと言っていた。

雨脚も昨日から変わることはない。朝からの陰鬱とした雰囲気も変わることはなく、学校でもどこか重く沈んだ空気が漂っているような感じがした。

昨日の夜から続く違和感、もしくは他者からの視線も、この雨のせいかもしれない。とにかく前日からのことで疲れているのも関係しているのだろう。

それに一つ、不可解な事もあった。いつも飄々とした感じを崩すことのない誠が、どこか大人しいのだ。しかも思い詰めたような表情をしている。

こちらが何か尋ねても「ああ」とか「うん」とか、曖昧な感じで返事を返してくる。まったく他へ意識することがなかった。

授業が終わり誠の机へ行く。授業が終わったというのに、未だ心ここに在らずだった。

「誠。お前さあ、工藤彩音って知ってるか？」

誠が振り向いた。どこか顔色が悪い。
実は怪訝な表情をして尋ねた。

「どうしたんだ？」

「な……なんでもない……」

「いや、お前顔色悪いって」

「本当に何でもないって！」

そう言った誠の身体が僅かに震えていた。
自分が興奮していることに気付いたのか、誠はその顔をキョロキョロとさせながら、再び椅子に腰かけた。
青ざめた顔を実に向ける。その表情はどこか無理をしているのが分かった。

「で、どうした？」

「いや、あの、えっとお……」

「早く言えよ！」

突然の怒鳴り声に、まだ教室に残っていた生徒たちが全員、実達を見た。

実は曖昧に笑ってその場を誤魔化すと、他の生徒たちは自分の作業へと意識を戻した。

実は再び誠を見た。肩が上下している。まだ興奮しているのか、呼吸が荒い。

恐る恐る実は尋ねる。

「あ、あのさ……、工藤彩音って、知ってるか？」

「いや、知らない」

「そうか」

「あ、ああ、それなら先生に聞いたらどうかな？ 何も知らなくても学校の資料とかあるだろ？」

纏れた足のようにとどろく、呂律のまわらない口調で話をする。

やや早口になっていることに、誠自身気付いていない。

「そ、そうか」

「お、俺も手伝うよ！」

「あ、う、うん……」

相手の勢いに押され、断ることが出来なかった。

もつとも断る理由もないのだが、どこか今の誠には危うさがあった。本人が語ることをしてないのであれば、こちらから尋ねることもしない。それが二人の暗黙の了解であった。

二人は教室を出て、職員室へと向かった。おそらく教師の誰かに聞けば、何か判るはずである。

職員室に入れば、当然のごとく幾人かの教師が自分の机の上で作業を行っていた。

さて、誰に話を聞こうか？ 実がそう考える間もなく声を掛けられた。

「どうした神田？」

声のした方を見れば、荒井直樹あらいなおき——物語中、栗原輝和の名前が荒井直樹へと変更になりました——がそこに居た。

突然声を掛けられ戸惑うが、実は一步踏み出した。

「あの、学校の生徒とか名前とか分かるもの、ありませんか？」

「そんなもの何に使うんだ？」

「いや、あの……」

「当然のことだが、答えられないことに、そういったものを貸すことは出来ないぞ」

「いや、じゃあ工藤彩音という人物を探しているんです」

「工藤……彩音……」

荒井はクルリと実たちに背を向けた。何事か考えているようでもある。

再び振り向くと、どこか真剣な表情であった。

当然だろうな、生徒が他の生徒を調べようとしてるのだから。

「なんで死んだ生徒を探している？」

「えっ……！？」

「なんだ、答えられないのか？」

「あつ、その……」

工藤彩音が死んでいる。ならメールの人物はそのことを知っているのだろうか？

簡単に分かった事实に、実は喜ぶことは出来なかった。謎とか恐怖とかいった負の感情が、実の心を覆っていく。

自分の顔もおそらく、隣にいる誠と同じくらい真っ青になっているだろう。

恐る恐るその真実を語った教師を見れば、いつもと変わらぬ穏やかな顔を浮かべていた。その顔ですら今は恐ろしく感じられる。

そして荒井の問いに対して、返答に窮した。何と答えていいのだろうか。

その死者の名前を騙る人物から、メールがありました。たとえば、おそらく笑われるだけだろう。

けれど真実は知りたい。ゴクリと唾を飲み込んだ。

「工藤彩音って人から、メールがありました」

「はあ？」

相手は、何をバカなことを言ってるんだ、といったような表情を
してるだろう。

だろう。というのは、このような事を言う自分がアホらしく、そ
のため相手の顔を見て話することが出来なかったからである。

「で？」

「えっ？」

「で、そいつは何と言ってるんだ？」

「私を探してほしい、って……」

「はあ……」

穏やかな顔はどこか呆れたような表情になっていた。バカな事を
言うな、とでも言いたげである。

実際実自身もバカな事を言った、という自覚はある。けれどそう

言わなければ、相手の素性を知ることが出来ないし、手掛かりが途絶えてしまう。

バカな事とは分かっているけど、真実を言ったほうが賢明と判断した。ただそれだけである。当然相手の反応もある程度予想はしていた。この反応は予想の範疇である。

「まあ、あまり下らないことに首を突っ込むな。お前たちも学生なんだから、学業にこそ精を出すべきだろう?」

「は、はあ……」

他の教師の視線を気にしながら、軽く頭を下げる。隣にいる誠も頭を下げるのが見えた。

「ところでそのメールだが、本当にこの学校から送られているのか?」

「えっ? は、はあ」

「そうか。まったく、誰が学校の公共物を使って、そんな悪戯をしてるんだ!」

荒井が少し不機嫌そうにしているのが分かった。

帰り道、降り止むことのない雨に靴を濡らしながら、実と誠はゆ

つくりと歩いていた。
お互いに会話はなく、ただ黙々と歩いている。突然、誠の足が止まった。

「あ、あ、あのさ、俺さ……」

「ん？」

実も立ち止まり、誠の方へと振り返った。
雨は霧雨となって靄をつくり、どことなく視界が悪い。
誠の足元には、霧がかっていた。

「お、俺、俺さあ……、もしかしたら、殺されるかもしれない……」

「は、はあ？」

口をあんぐりと開けた。相手が何を言ってるのか理解できない。
意味の解らないメールを受け取って、もしかしたら殺されるかもしれないのは自分かもしれないのに、なぜ誠がそんな事を言うのか。
実が間拔けな顔になるのも仕方がなかった。
一つ頭を振る。相手の真意を確かめる必要があった。

「えっとお誠、お前何言ってるの？」

「いや！ あの……、その……」

誠の顔が、どこか恐怖に歪んでいた。

メール 第四話（前書き）

これで終わるはずだったのに……orz
今回は静奈と優は出てきません。

メール 第四話

ななっ……

メール

第四話

作：ことぶきはじめ

傘が地面に落ちた。コロコロと風に煽られ路肩へと転がっていく。霧雨がゆつくりと誠を濡らしていく。けれどそれを気にすることなく、一歩、さらに一歩と実へと近づいていく。

実はどこか狂気じみた誠に、一歩も動くことが出来なかった。まるで金縛りにあったような、全身が己の身体でないような感じがする。

気が付けば、顔がくっつくほどの距離に誠の顔があった。やはり彼の顔は青褪めていた。

突然両肩を力強く掴まれ、そして大きく体を揺らされた。

「な、なあ、どうしたらいい？ 俺、俺……！」

「い、痛いって！」

最初はボソリと話していた声が次第に大きくなっていく。それに比例するように、実の肩を掴む手に力が入っていく。実は、自分の肩を掴む誠の手を振りほどいた。

バランスを崩した誠は、無防備な状態で地面に投げ飛ばされたかたちとなった。しかし投げ飛ばされた事にも気付か無いような感じで、誠はその場にへたり込んでしまった。

実はしばらく呆然とそれを見つめるが、すぐに我に返ると、誠に手を差し伸べた。さすがにこのままでは全身がずぶ濡れになってしまう。

誠は差し出された手と、手を差し出した相手の顔を見比べる。それからしっかりとその手を掴んだ。

引き上げられるようにして立ち上がり、泥を払い、落した傘を拾う。少し弱まったかと思われた雨が、再び勢いを取り戻した。言葉を掻き消すほどの勢いで降り続いた。

「どうしたんだよ、なんか変だぞ？」

実が怪訝な表情で尋ねる。

誠を見れば少し顔色が悪い。少し体が震えているが、雨で濡れたせいだけではないだろう。

唇を震わせながら、誠は口を開いた。

「い、いや、なんでもない……。あれは、何でもなかったんだ！俺は何も見えてないんだ！」

「いや、だから落ち着けて！」

「ハハハ！ そうだよ！ 明日もう一度行って、確かめてみればいいんだ！ あれは何かの間違いさ！ そうさ、きっと誰かの悪戯さ！」

誠は狂ったかのように笑いだした。

見てはいけないものを見た、と言ったが、果たして何を見たのだろうか。

そのことを問い質そうとするが、誠は雨の中をフラフラと彷徨うようにして帰路についたので、声を掛けることは出来なかった。

その後ろ姿はどこか不吉で、死神でも纏わりついているような感じがあった。

誠がいつもの角を曲がったのを確認する。それを見送ると、うすら寒いものを感じつつ、実も自分の家へと帰っていった。

深夜にほど近い時間。

いつもの通り家のことを終え、少し遅い時間にパソコンの前に座る。

遅くなったのには理由がある。どうも誠の様子がおかしいのだが、その理由が今一つはつきりしない。そのことが気になり、集中できなかったせいである。自分の関わっている事と無関係なのか、それとも別の角度で関わっているのか。それすら判然としないでいる。

明日学校で詳しく話を聞く必要があるな。場合によっては警察に相談する必要があるかもしれない。このような時期であるため、警察も真剣に話を聞いてくれるはずである。

けれど今は一先ず誠の件は置いておこう。それよりも例の死者からと思われるメールの件である。

頭の中が少々混乱しているものの、実はいつもの手順でパソコンを立ち上げた。

これもまたいつもの手順でメールを確認する。やはり今日もそのメールはあった。

ある程度慣れたとはいえ、実は不吉な感じを拭いきれずにいた。やや躊躇ってメールを開けた。

実の瞳がギョツと大きく見開かれた。実自身はその画面を見てはいけないと思っている。

けれど自分の意思とは無関係に、硬直した視線はパソコンの画面に張り付いたまま動こうとせず、そこに書かれた文章は否応なく視界に入ってくる。

——私は花壇に埋められた。私を捜して。

さがして

搜して。

あ f r f s

サガシテ

さちやれがZd

さがして

d z h y

搜して

さがして

搜して さがそて

さがして 搜して さがして。 搜してさがして

搜して 搜して 搜して 搜して

搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。

搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。

搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。

搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。

搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。

搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。

搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。

搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。 搜して。

搜して

[illegible]

——捜して。延々とそれだけが綴られていた。相手の執念、もしくは鬼気迫るものを感じる。

しばらく呆然としてそれを見ていたが、すぐに我に返ると、硬直した身体を何とか動かし、気味の悪い画面に布を被せた。

背筋に悪寒が走る。恐怖からか、身体が震えていた。

不意に何かの気配を感じた。いつもよりも薄暗く感じられる自分の部屋を見渡すが、誰もいない。当然だ。この部屋には自分しかないのだから。

顔から血の気が引いていくのが分かった。呼吸も少しずつ荒くなっていく。異様なほどに圧迫感のある気配が実を取り囲んでいるように、なんとも息苦しい感じがする。

けれどこの部屋には自分以外、何もないことは分かっている。気のせいだとも思う。分かっている、もう一度辺りを見渡す。が、やはり何もおかしい所はない。

異様な感覚に囚われながら、実は這うようにして自分のベッドへと潜り込む。それから布団を頭から被る。

布団の中でしっかりと目を瞑る。布団の中で丸くなりながら、部屋の電気も消さずにそのまま朝になるのを待つ。けれど、先ほどのメールがあまりにも衝撃的すぎて、僅かな物音さえ今の実には恐怖であった。

——ピチャリ、ピチャリ、ピチャリ……。階下から水滴が滴る音が聞こえる。布団をさらに被り耳を塞が、なぜか否が応でもその音が耳に入ってくる。

さらに強く目を瞑る。膨らむ想像が、さらに得体のしれないものを想像させるのか、実は自分の周りを何かがクルクルと回っているような、そんな錯覚を感じていた。

確認したいという好奇心を圧殺し、そのまま布団の中で丸くなる。それも束の間で、精神的な疲れからか、いつの間にか実は微睡の中へと落ちていった。

翌朝、雨はまだ降り続いていた。前日よりもいささか雨脚が衰えている。

もしかしたら鬱陶しいまでの雨はもうすぐ終わり、週末ぐらいには久しぶりに陽の光を拝めるのかもしれない。

けれどそれにはもう少し時間が必要で、今日明日はまだ、すこし湿り気の多い日となるみたいだった。

実はあまりよく眠れなかったのか、重たい瞼を擦り、ベッドから這い出してきた。

部屋を見渡すといつの間にかパソコンの電源は切られており、部屋の電気も消えていた。

おそらく遅く帰宅した母親が、部屋の電気を消したのだろう。階下へ降りる。やはり両親の姿はもうそこには無かった。

朝食を口に放り込みながら、昨日のメールについて考える。

あれは学校の花壇に埋められた。という事なのだろうか、と。

もしそうだとすると、それがどこの花壇を指しているのか今一つ判然としない。

——それに、その死体を探し出したとして、僕に一体何ができるというのだろうか？

恐怖からくる好奇心で始めたことであるが、一体この件に、自分が何をするべきなのか。

その死体を見つけたとして、一体何が解決するというのか。実には疑問が多すぎる。そしてその疑問を解決する術を、実自身は持っていないかった。

いつもの通りに学校の校門を抜け、校舎の玄関口へ向かう。その時校舎の前の花壇が目に入った。昨日のメールが頭を過る。

綺麗な紫陽花が真つ青な花を咲かせている。その隣には赤い紫陽花も咲いている。さらに隣にはチューリップなどの花々も、この雨に濡れる少し肌寒い時期に、花を咲かせていた。

おそらくその先の旧校舎の方にも、使われていない花壇などが存在するだろう。以前見た時、旧校舎の方では真つ赤な花が綺麗に咲いていたのを見たことがあった。

あれはいつの頃だったか……。記憶を手繰り寄せようとするが、綺麗だという印象のみが先行し、時期の判別までは出来なかった。

ゆつくりと校舎へ向かう。前日のメールが妙に引っかかり、そこで咲き乱れる青い紫陽花が印象に残った。

メール 第四話（後書き）

最初からこんなに長いと、後が大変な気がする……。

メール 第伍話

ななつ……

メール

第伍話

作：ことぶきはじめ

実は教室へと入った。「おはよう」と声を掛ける。幾人かが返事を返した。

自分の席へと着き、そこから教室内をグルリと見渡すが、誠の姿はなかった。

朝の登校中にも姿を現さなかったから、もしかしたらすでに登校してるのかと思ったが、彼の席は依然空席のままであった。

もつとも、いつも手ぶらで登校するため、いるかどうかは本人の姿を確認してからでないと分からないのだが……。

両腕を机の上に放り投げ、その場にうつ伏せになる。クラスメートの声をシャットアウトして、考えを纏める。

誰が送り付けて来たともわからないメール。本当に死者からのメールなのか、それとも生きている誰かの悪戯なのか。

あの気味の悪い文面を見れば、確かに死者からのメールと聞いたくなるかもしれない。けれど、生きている人間の嫌がらせではない

のか。

そしてあの文面の意味、あれはやはり……。考えは堂々巡りを繰り返す。

人影が実の前を通った気がした。それに気付いて頭を上げる。キヨロキヨロと辺りを見渡せば、いつもの席に誠の後姿を発見した。立ち上がり彼の席へと近付き軽く肩を叩く。そして声を掛けた。

「よう！」

ビクリと誠の肩が震えた。恐る恐るといった感じで振り向く。見知った顔を見て安心したのか、安堵の表情を浮かべた。

「な、なんだよ。ビクリさせんなよ」

「昨日は大丈夫だったのか？」

「あ……、ああ、大丈夫だ。今日、っていうか、さっき確認したからな」

「？」

「い、いや、こっちの話。わ、悪いな心配かけて」

まだ少し顔が青ざめているものの、先日ほど動揺した様子はない。それだけでも安心できるというものだ。けれどまだ謎は残る。

「いったい何を見たんだ？」

「ん？ あ、ああ……」

妙に歯切れが悪い。思春期特有の感性として、ポルノ本やAVなどという話であれば、これみよがしに話を振ってくるはずである。とくにこの田所誠はそういった人物である。けれどそうでないということは、何か他のものだろうと想像がつく。それが何であるかは別として……。

「だからいったい何を見たんだよ？」

「いや、もう忘れてくれ。多分勘違いか何かっていうだけの話だからさ」

「はあ？」

昨日あれ程怯えていたのに、多少は引き摺っているものの、平静を装っている。気にするなというほうが無理である。

実の真剣な表情に根負けしたのか、誠は一つ溜息をついた。

「じ、じゃあさ、言うけど、俺、変なDVDを見たんだ」

「洋物？ それとも裏かよ？」

そういったものを見て後悔したとは考えにくい。けれど、できればそちらであってほしいと思う。

道徳的な問題には目を瞑り、思春期特有の好奇心で済む話なのだから。

「違っって」

誠はあっさりと否定した。

「じゃあ何だよ？」

少し苛立った様子で尋ねた。妙に要領を得ない話し方であり、それが気に喰わない。

「人殺しの映像……」

二人の空間だけが止まったような気がした。周りではクラスメイトが騒いでいるというのに、この二人の間だけは静かな空気が流れていた。

それを打ち破ったのは実の笑い声だった。その笑い声は、周囲の雑音の中へと掻き消されていく。特に二人を奇異に見る視線はない。

「だ、だから話したくなかったんだよ」

「い、い、いや、だってなあ……」

「真面目に話して損したな。こっちはマジで悩んでたのに」

「そ、そ、そんなもんで見つけたんだよ」

笑いで声が引きつったような感じになる。誠はそんな実をジト目で睨み、頬杖を突きソッポを向いた。

「視聴覚室」

ぶっきら棒にそれだけを言う。

「はあ？」

「いや、ちょっと内緒でな、モクるのにちょうどいいと思って、少し前に職員室で鍵を失敬して、コピーしといたんだよ」

「お、お前なあ……」

呆れた。誠がタバコを吸うのは知っていたし、それを止めはしなかった。けれどここまでやっているとは思わなかった。裏切られたわけではないが、なぜかそんな気がした。

「んでな、そこで何かおもしれーモンないかなあと思って物色してたらさ、何枚かのDVDを発見したんだよ」

「何やってんだよ」

「ラベルの無いのが何枚かあって、それを家に持って帰ってみたんだけど、まあ何枚かは、何年か前の学園祭とかだったんだけどさ、最後の一枚がさ、なんかすっげー生々しい殺人ショーだったんだ……」

誠の声が僅かに陰る。そのことを思い出したてか、カチカチと歯の噛み合わさる音が聞こえた。

「それ一昨日のことか？」

「い、いや。一昨日の昼休み。ちょっと、な」

「なにがちよつとだ。んなもん自業自得だろう？」

「そう言っつなつて。マジで反省してるし。しばらく禁煙するわ。んでさ——」

実は眩暈がするのを感じた。誠のやっていることは空き巣同然の行為である。しかも学校の物品を盗み出すとは……。

「——最後の一枚だけラベルが無かったんよ。んで、なんかちょっと期待するだろ？ 期待して観てみたら、バツリと人が死ぬシーンだったんだ。あれマジでビビったぜ」

「んで、そのDVDどうしたんだよ」

「昨日の朝、ソッコーで視聴覚室に返しといた。でもさ、スッゲー気になるじゃん？ で、今日の朝、もう一度確認しに行ったら」

「行ったら？」

呆れた口調で鸚鵡返しに返す。

「もう無かった」

「無かった？」

怪訝な表情で誠を見た。誠はノホホンと構えているが、事はより重大なのではないだろうか？

もし本当に、そのDVDが事実だとしたら……。

「綺麗さっぱり。DVD自体無くなってた。まあ内容は、なんか女の子がさ、殺される映画か何かだったと思うんだよ。青い時計をした女の子でさ。ちよっとリアルだったなあ。まあ、先生が誰かが、忘れたのを取り戻したんだろ？」

「誠、お前――」

「おい！」

声のした方を向く。少し早い時間に、担任教師が教壇に立っていた。

全員が自分の席へと戻っていく。僅かに尾を引きながら、実も自分の席へと戻っていった。

「花壇に死体？」

夕方、教室内で素っ頓狂な声を上げたのは誠だった。前日までの事を全て忘れたかのように振る舞っている。いや、単純な誠の事だから、本当に忘れているのかもしれない。

実は思い切って事の経緯を話した。夜に送られてくるメールの事、そして昨日のメールの内容の事、を。その話を聞いた誠の反応は、上記のとおりである。

それにしても、今度は実が真剣な表情で相対している。朝とは真逆の光景だ。ようやく余裕の出てきた誠は、話を聞き終わっても、いつもの通りヘラヘラと笑っている。

「なーんかさあ、ドラマか何かで見た記憶だけさあ、紫陽花って、死体に反応して、花の色が青色になるんだってさ」

「青色？」

「そつ。それで犯人がどこに死体を埋めたのかが分かる。とかって内容」

「それ本当か？」

「土がなんか関係してるとか言ってたけど、なんだったっけ？」

「……………」

「ん、どうした？」

「いや、学校の玄関先の紫陽花って、一つだけ青くなかったか？」

「そうだったけ？」

「間違いないって」

そう言つて実は立ち上がると、そのまま教室を飛び出していった。すでに放課後であるため、走り抜けていく廊下には、人の姿はまばらにしか存在しない。

教師たちも部活や自分の仕事で、玄関先の紫陽花にまでは気を回さないだろう。だから今の時間であれば、少し土を弄るくらいのことは出来るかもしれない。

玄関先にまで辿り着いた。小降りになった雨に打たれつつ、息を切らせて玄関前の紫陽花を見る。

幾つかの紫陽花が群れをなし、その一つが青い紫陽花を綺麗に咲

かせていた。

「お、おい」

追いついてきた誠が声を掛けた。

気付かぬふりをして、玄関に置いてあったスコップで土を混ぜ返し始めた。

紫陽花の根を張った土は硬く、数センチ掘り進めるのが精一杯といった感じである。

それでも諦めず、土に穿つ。

「何やってるの！」

少し甲高い声が響いた。

雨に打たれつつ振り向けば、そこには黒く長い髪を後ろで束ねた女性が立っていた。

「芥川先生……」

あくたがわすずか

芥川涼香。20代後半の教師である。長身で少しやせ過ぎとも思

える体躯で、青白い顔色が神経質そうな印象を与えるが、やや甘ったるい声がその印象を微妙なものにしている。

少し顔を傾げ、緑の透明フレームの眼鏡の奥にある大きな瞳で、実を不思議そうに眺めている。

見つめられている二人は、いきなりの事に動転し、間拔けな顔を晒していた。もっとも、まだ夕方で、教師たちが学校にいるのは当然で、見つかるのは時間の問題である。

「いや、その……」

実の声が詰まる。咄嗟に応えたのは誠だった。

「僕たち園芸部でして、この紫陽花だけ青いなんて不思議だなあー……、なんて思いました……」

「も、もしかしたら、死体でも埋まってるのかもと思って……。あ、ああ、すぐに片付けます」

涼香はさらに怪訝な表情をして、二人を見つめた。その視線に晒され、二人は土を戻していく。

無駄な作業を終えた二人は、苦笑ともいえない微妙な表情で、お互いの顔を見合わせる。なんとも気まずい。

しばらく沈黙していると、コロコロと可愛らしい笑い声が聞こえてきた。見れば涼香が、まさにお腹を抱えて笑っていた。

「アッハハハハ！ 紫陽花の下に……、死体だって……、アハハハハ！」

ヒイヒイと苦しそうにして笑っている。呆氣にとられて、再びお互いの顔を見合わせる。

いつもの神経質そうな表情は、どうやら教壇の上だけのものらしい。お互いの瞳がそう物語っていた。

「はー、花壇をめちゃくちやにしてくれちゃって……。何をやるかと思ったら」

目じりに溜まった涙を、眼鏡を外して拭いとり、呆れた表情で二人を見つめる。

花壇を荒らしたことを怒るのかと思ったが、存外そういうことではないらしい。どこかピントが惚けている感じがする。

「いえ、でもね先生。前にテレビでやってたけど、死体の埋まっている紫陽花って、色が青色に――」

「ああ、確かにそういう話はあるわよ。けれどね、紫陽花の花――実際には萼がくと呼ばれる部分なんだけど。その部分の色が変化する理由としては、色々あるの。

まず第一に、アントシアニンと呼ばれる色素。それに補助色素と呼ばれるものによって色が変化するの。それと土のPHね、これも紫陽花の萼の色を決定する要因の一つでしかないの。

あとはそうね、花卉に含まれる補助色素によって、いくら酸性土壌であったとしても、遺伝的に青になりにくいものがあつたりするわ。それともう一つ、地中に含まれるアルミニウム含有量も影響するわね。

仮に酸性土壌だとしても、地中に含まれるアルミニウム含有量が

少なかったら、青色の萼にはならないわ。それに最初は青い紫陽花も、咲き終わりに近づくと赤くなったりするわね。これが紫陽花の色の変化と呼ばれます。

あなた達の言っている、死体の上に植えられた紫陽花の花の色は青色。っていうのはね、死体の骨に含まれるリンに、紫陽花が反応したものだと思われるわ。

それにあなた達も少し掘って分かったと思うけど、そんな小さな花壇に死体を埋めるなんて、すごく至難の業よ。紫陽花は低木で、その近くに掘らなきゃいけないんだから。人一人入れようと思ったら、それこそ徹夜覚悟になるわよ」

「なるほど」

「それにしても――」

3人は雨を避けるために、玄関先へと場所を移した。シトシトと降り続く雨を眺めて、涼香は話を続けた。

「紫陽花の下に死体があるなんて、何でそんな事を考えたの？」

いつもの神経質そうな表情は消え失せ、その雰囲気とは違った好奇心旺盛な表情が滲み出ている。

この表情から察するに、こちらが本来の彼女なのだろう。なら教壇に立った時の神経質そうな表情は、緊張のためなのかもしれない。

「こいつがね、なんか変なメールが来て、そこに『この学校の花壇

に死体が埋まっている』なんて書かれてたって言うんですよ」

「おい、誠！」

眉を顰めて抗議する。けれど誠は聞く耳を持たない。
少し話大袈裟に、手振り身振りで話していく。

「なるほどねえ。まあ、それ自体悪戯だと思うわよ。あまり気にしないことね」

「はあ……」

真剣に悩んでいただけに、あっさりとそう言われると拍子が抜ける。

「ああ、それとね、あそこの紫陽花は園芸部の管轄じゃないからね。それじゃあね、偽の園芸部員さん」

そう言い残して涼香が立ち去る。けれど数歩歩いたところで立ち止まり、もう一度振り向いた。その顔が心なしか、笑っているように見える。

「この学校って結構いるから、あなた達気を付けなさいよ。……って言うっても、遅いかな？ 特に青い腕時計の女の子には気を付けな

さい」

視線は実と誠の間を見ている感じである。けれどその場所には何も無い。

実達に最後の言葉は聞こえなかった。

二人と別れた涼香が、廊下を歩いていく。

「先生」

後ろから声を掛けられた。ビククリして振り返る。

涼香は、いきなり、という行為に物凄く弱い。だから今回も緊張の面持ちで相手を見た。それはいつもの教壇に立っている時の厳しい表情であった。緊張するとこのような表情になる。が、相手を見た途端に、その表情は破顔した。

「あら、どうしたの？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2179z/>

ななつ.....

2011年12月24日21時54分発行